

2024年11月18日

園内研修

『ともにあること』を支える保育実践のあり方

「ともにあること」を支える保育実践を考えようとするとき、自らの実践を振り返り、言葉にして語り、書き記すときに、それが自分にとって都合のよいものがたりになってはいないだろうか。言葉にしたことが実践として表現されていたのだろうか。

「ともにある」ことを願い実践を重ねているが、そのあり方に変わることはない正解の形があるわけではない。だから自らの実践を立ち止まり見つめることで「ともにある」ということの意味と価値を生成し続けようとしている。

福井大学准教授の宮本雄太氏をお迎えし、「ともにあること」の実践について迫っていく。

本研修の目的

日々、教育実践の背景にある自らの実践論理を言葉にしながら自身の教育観を問い直している。そうした積み重ねの中で、「どうありたいか」が臍げに見え始めてきた。子どもと子どもを取り巻く私たちが同じ一市民として、同じ地平で心地よく生きていくことを対話と省察によって紡いでいきたい。「ともにある」ことを願い、権利主体としての「子どもの声」を聴く実践への転換を図ろうとしている。

本研修では、じっくりと自らの保育実践を見つめながら「ともにある」という保育実践の意味について探究的対話をすすめていく。そのことによって、今ここに身をおくわたしたちはどうあるのか、自身の実践の背景にある論理とそれによって表現された実践についてつかみとっていく。(参加者：10名)

研修設計

<研修時程>

日時：11月18日（月）
9:00～16:00（午前の部）
9:00～11:30 保育参観
11:45～12:00 各学年D.D.
12:00～13:00 昼食・休憩
（午後の部）
13:00～13:10 趣旨説明と講師紹介
園職員自己紹介
13:10～13:30 本園の教育について（鎌内）
13:30～15:00 本日の保育実践をめぐる対話
・穴戸佳央理（4歳児担任）より話題提供（本日の保育より）
・話題提供を受け感じ考えたことの対話
15:00～15:30 宮本雄太先生より話題提供
15:30～16:00 宮本先生の話題に各自の実践を絡めた語り合い

研修設計を振り返って

本研修には、話題提供をした4歳児の短時間教諭2名が参加した。普段は担任のみが参加することが多い園内研修に、短時間教諭が参加することによって、宮本先生のお話から受けて感じ、考えた子どもの姿や育ちの方向性について学年全体で語り合うことができた。

研修後も、遊びを形作ることと見守ることについて話題になった。ともに研修に参加し、実践について語り合うことによって、それぞれの学びをその後の実践にもつなぎ、考えていくことができた。

宮本先生より話題提供

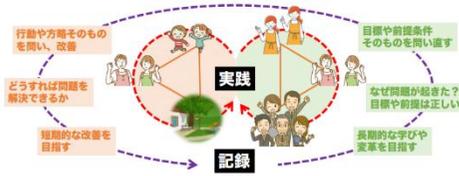
奈良女子大学附属幼稚園の実践研究プロセス・実践研究ビジョン

日々積み重ねている教育実践と実践に基づく教育観の問い直しの積み重ねの中で、「どうありたいか」が麗げに見え始めてきた。子どもと大人が同じ一市民として、同じ地平で心地よく生きていくことを対話と省察によって紡いでいきたい。「ともにある」ことを願い、権利主体としての「子どもの声」を聴く実践への転換を図ろうとしている。

自らの実践を振り返り、言葉にして語り、書き記すときに、それが自分にとって都合のよい物語になってはいないだろうか。言葉にしたことが実践として表現されていたのだろうか。

日々積み重ねている教育実践と実践に基づく教育観の問い直しの積み重ねの中で、「どうありたいか」が麗げに見え始めてきた。子どもと大人が同じ一市民として、同じ地平で心地よく生きていくことを対話と省察によって紡いでいきたい。「子どもの声」を聴く実践への転換を図ろうとしている。

「子どもの声を聴く」実践
 - 子ども理解の深化
 - 子どもの自己肯定感の向上
 - 信頼関係の構築



「ともにある」という保育実践における意味探究の対話を受けて



日々積み重ねている教育実践と実践に基づく教育観の問い直しの積み重ねの中で、「どうありたいか」が麗げに見え始めてきた。子どもと大人が同じ一市民として、同じ地平で心地よく生きていくことを対話と省察によって紡いでいきたい。「子どもの声」を聴く実践への転換を図ろうとしている。

同じ地平で生きていくことの大切さ
 立場・所属の違いではなく...



「ともにある」ことと スローであること

ともにあること	軌道を外れること	<ul style="list-style-type: none"> 「共にある」ことであり、子どもや大人や素材のリズムに注意深くすること 速く激しい瞬間があれば、ペースを落とすこともある 聴き、協働するための時間を作る 個人だけでなく集団も養える 遊びと今この瞬間を大切にすること 長い道のりと時間をかけて醸成すること 測定困難なものも大切にすること 深い発見を可能にし、関係性を強めることを目指す (Clark, 2022: 49)
(ともに)沈潜すること	長い目でみること	

Alison Clark (2022) Slow Knowledge and the Unhurried Child ①

参加者のふりかえり (抜粋)

語り合いを振り返ると、どのグループでも今の関係性において他者が自分をどのようにケアしているか他者の存在によって自分が支えられていたり思考のプロセスに変容があったりしていることを自覚化していったように思います。保育実践は正解もなく、固定化されたものではない。だから面白いと感じる反面と、教育という営みだからこそこれでいいのかと常に不安や不全感を抱きます。その不安も含め声として「発する」こと、そしてその声をそのままに「きく」ことで意味を作り出そうとしていること、そのケアが同僚との「ともにある」を支えているのだと感じました。

「ともにある」というあり方に日々向き合い考えてはいるけれど、それが保育実践の中で実質化されているのだろうか、身体化されているのだろうか悩みながら過ごしていました。本研修修で、改めて自分自身が、自分たちがどうありたいのかを考える機会をいただきました。宮本先生が仰っていたように、「ともにある」を単なる音声言語だけではなく、互いの関係性の中で感情、行動、思考を含む相互作用と捉えながら、彼らと実践を創っていきたいと考えています。不確実であることを楽しみながら実践をしていきたいと感じました。